

観光施設メディアラボ

公益社団法人国際観光施設協会編



公益社団法人国際観光施設協会 推薦
能登上布織元 株式会社山崎麻織物工房 専務取締役

久世 英津子

はじめに

上布（じょうふ）というのは上等な麻織物のことで、能登上布は日本の五大上布のひとつとされ最高級の夏着物です。起源は約 2000 年前と伝えられていて、江戸時代に発展し明治時代皇室の献上品に選ばれるまでになりました。

昭和初期の最盛期、織元の数は 120 軒以上になり、石川県無形文化財の指定も受けましたが、戦後のライフスタイルの変化とともに着物離れが進み、約 40 年前から山崎麻織物工房が能登上布唯一の織元になりました。

能登上布の主な技術として、緻密で凛とした経緯縞をうみだす能登独自の櫛押捺染やロール捺染と呼ばれ



手織り風景

る伝統の手染技術や、昔ながらの手織りが挙げられ、今も自社の工房にてすべて手仕事で職人がおこなっています。

原料の麻は一般的なりねんではなく、日本古来のラミー（苧麻）を使用。そのため、シャリ感、光沢感、張り感、親子三代と言われるほどの丈夫さがあり、手織りの麻ゆえさらにひんやり涼しく、「蝉の羽」のような透け感や軽さ、独特の麻の素材感が特徴です。

そして工房周辺の土手には昔から苧麻が生えているほど豊かな自然に囲まれていて、自然と寄り添うなかでものづくりが行なわれています。曇りや雨や雪が多い石川・能登の地で、色鮮やかではなくグレース hues で深みがある能登里山や日本海の自然を映した、落ち着いていてすっきりとした色柄も能登上布の魅力のひとつです。日常に溶け込み現代の生活にもなじみます。



山崎麻織物工房外観

ものへのホスピタリティ やさしき能登と手仕事から生まれる能登上布

公益社団法人国際観光施設協会 推薦
能登上布織元 (株)山崎麻織物工房 専務取締役

久世 英津子

能登を表す言葉として有名な「能登はやさしや土までも」の言葉のとおり、能登の人々は優しくひたむきで我慢強く粘り強く、その気質が能登上布の繊細で根気のいる工程を支えてきました。昨年1月震災がありましたが、能登の人々を想起させる能登の優しい風景を能登上布で表現したいとさらに思いを強くしています。

能登上布の魅力を再定義、 伝統技術を繋ぎ本物を届ける

現在、工房では能登上布に魅せられ上布を作りたいと情熱を持った女性たちが県内外から集まり、20名の職人と織子（機を織る職人）に支えられています。ここ数年毎年織子が増えていて世代は20~80代前半と幅広いですが、新しく入った織子は熟練の織子から技術を習得し伝統の手



苧麻

仕事を受け継いでいます。

また、工房では年に1回、能登上布年納めまつりと題して見学・体験・販売を行なっています。実際に工房に来ていただくことで、この能登の地が持つ魅力や自然を感じながら、能登から生まれた能登上布の手仕事に触れてもらえたらと考えています。

私は三代目織元である祖父の「こんなによいものを残さないのは罪だ」という言葉と、唯一の織元として能登上布を懸命に守っていた姿を胸に、能登上布の魅力を再定義し、伝統と共に現代の日常に溶け込

む着物や帯・ファッション・小物・インテリアを社内で日々企画し展開しています。

その多岐にわたるアイテムをお手にとってくださる顧客の方が「洗っていくうちにどんどん柔らかくなって心地よい」「触っているだけで心が安らぐ。職人さんが丁寧に織ってくれているのがわかる」と言ってくださいます。

これは、職人によって受け継がれている丁寧に緻密な手仕事と、より美しい能登上布をつくりたいという職人の思いがしっかりとお客さまに届いているのではと思っています。代々守ってきた職人による伝統技術を繋ぎ本物の能登上布をお客さまに届けることで、お客さま一人一人の心に残ってくださればと心から願っています。これからも手仕事を守り抜き、工房の皆と一緒に能登上布の未来をつくっていきたいです。



工房周辺の風景



能登上布ストール

連載

SERIES